

家族への手紙コンクール入賞者



日頃、面と向かうとなかなかうまく伝えられない思いや感謝の気持ちなどがつづられた手紙が109通寄せられ、次の皆さんが入賞しました（敬称略）。

生涯学習課（☎62-1036）

最優秀賞 1人

「青空のように」

中間悠里（朝日中2年）

優秀賞 10人

「うまれてきてくれてありがとう」

小田宗太郎（日高小2年）

「つないでいくよ命のバトン」

小林慶太郎（住吉小3年）

「だいすきなあいちゃんへ」

伊與田華（朝日小4年）

「寄り添ってくれた家族」

大島琉雅（機ジエイトクト高等学園）

「忘れかけた日常にありがとうを」

斧利哉（機ジエイトクト高等学園）

「家族へ」

小林蒼（機ジエイトクト高等学園）

「成長するために」

高橋優太（機ジエイトクト高等学園）

「子から母へ」

田川カート（機ジエイトクト高等学園）

「十九年間」

廣松滉貴（機ジエイトクト高等学園）

「感謝」

藤本愛斗（機ジエイトクト高等学園）

最優秀賞

「青空のように」

中間悠里

「まさか、私まで癌がんになるとはねえ。迷惑かけてごめんね。」

と、言ってくれて謝罪までしてくれたおばあちゃんに対して私は「うん。」

このひとりで終わってしまう。これが架空の物語であつたら、

「ただ話を黙って聞いてくれた優しい人」

になつてたと思う。でも、私は全く違つた。ただ、何も感じていなかったからなんだ。何をしても何をされても何とも思わなかったから、いつの時か本当にこれが笑つていいのか、泣いているのかさえも分からなくなつていたんだ。

でも、そんなおばあちゃんが私の気持ちを見過かしてくれたように言ってくれた時、

「悠里ちゃんの笑顔は可愛いね。」

この言葉をもらつて私はこんな人形みたいな笑顔でも人を幸せにできるんだ、と自分の笑顔に、心に自信をもらつたよ。ありがとう。

「ばあちゃんの命はもう短い。」と父さんから言

われたときには私はとても悲しかったり、うそだよねと思つたり、でもこんなときに自分にも心があつたんだと自覚する自分に腹が立つたり、遅いよと後かいしてるのが大きかつた。私はいつも人に言われてから気づく。自分の気持ちすらも分からなかつたので、今の今まで素っ気ない態度を少しでもおばあちゃんにしていたのがとても滑けいで、みじめだと氣ついた。ごめんね。後かいしたからといって病気が治るほど世の中が甘くないと誰もが知つているだろう。

だから私は、青空に手を伸ばして、ずっと、いつまでも願つているよ。おばあちゃんが好きだと言つてくれた私の笑顔で。

——永遠の命とかそんな大層な物が欲しいんじゃないくて、少しでも私にこの、青空のように澄みわたつた心を下さい。そして、もう誰にも私のような苦しい思いをさせないで、と。

ごめんね。そして、ありがとうおばあちゃん。